

子曰く、君子博く文を学び、之を約するに礼を以てせば、亦以て畔かざるべきかな。

夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く譬を取るは、仁の方と謂うべきのみと。

【大体の意味内容】先生はおっしゃった。「立派なリーダーたる者は、万巻の書を博覧して広く深く知識を蓄え、こうした広大無辺の学識を要約するにあたって、様々な書を生み出し残してくださった先人への感謝の気持ち、学ばせてくれた親や祖先への敬意、こうしためぐりあわせに導いてくださった神仏を言祝ぐ儀礼、を中心として行えば、最高の道から外れることはない。

仁者は、自分が立身出世したければ他人が立身出世できるように応援し、自分が志望や目標に到達したいと思えば、他人が志望や目標を達成するように導く。そのためにはまず、身近な小さな出来事の中に、実は貴重な「立身」や「栄達」の誉れがひそんでいることを示す。これが「仁」の実践方法というべきであろう。」

「戦国時代の武将たちに茶道の極意を伝えた千利休は、とくにその心を示す名歌として、藤原家隆の「花をのみ 待つらん人に 山里の 雪間の草の 春をみせばや」を示しました。「春の到来を待つ人たちは、薫り高い梅や、はでやかな桜ばかりを期待しているが、そのような人たちに見せたいものだ、山里に降り積もる雪がやや溶け初めて、かすかな隙間から見えてきた若草の緑を。そこから春の輝きが放たれるのを」といった内容です。「戦国時代」とは、中央政府の権威がなくなり社会保障も何もない状況で、自分たちの生活は自分たちの力で守り築かなければならない時代で、自然の猛威とうまく付き合うための土木技術を発達させたり、ほかの地域のリーダーたちと駆け引きしたり、戦ったりしていた時代です。ダイナミックではありますが、心休まるいとまのない世界で、茶道を通じての静かなコミュニケーションで、武将たちは魂の平穏とりもどし、冷静な判断力を磨き上げたようです。特に「雪間の草」に「春」の本当の輝きを見つけるといって、その研ぎ澄まされた精神状態に至ることが、茶道の極意であり、戦いにおいても、政治においても、生きる努力をするうえでも、最も重要なこととされました。

